

# 言葉を自覚的に用いながらより良い考えを創り上げる 子供を育む国語科の授業

## I 主題設定の理由

言葉は、学習活動を支えるものであり、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤である。最近では、SNSなどに見られるように、比較的短い時間や少ない量でやりとりが行われるようになるなど、情報化の進展に伴い、言葉を取り巻く環境が多様化してきている。また、現代において、求められるコミュニケーションについて、平成30年文化審議会国語分科会の「分かり合うための言語コミュニケーション（報告）」によると、「価値観が更に多様化し、共通の基盤が見付けにくくなるおそれのあるこれからの時代については、互いの異なりを乗り越えて歩み寄ることがこれまで以上に求められるであろう。そのためには、言葉によって考え方や気持ちを表し、互いに対する理解を深めていくことが欠かせない」<sup>1)</sup>とあり、コミュニケーションにおける言葉の役割の重要性が述べられている。

そのような状況と併せて、2021年度から本格実施される次期学習指導要領において、中学校国語科では「主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、学びの深まりをつくり出すために、生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか」<sup>2)</sup>といった、主体的・対話的で深い学びの実現を意識した視点で授業改善を進めることについて述べられている。

以上のような現状から、本校国語科では、子供たちの言葉の用い方に着目した。言葉を取り巻く環境や価値観が多様化した現状に創造的に対応していく力が求められる現在、学習活動やコミュニケーションを支えている言葉がもつ価値を認識し、言語感覚を豊かにすることで、言葉を通じて自己を表現したり、対象や他者に共感したりすることができるようになることを考える。国語科においては、自分の考えなどを広げたり深めたりすることができるように、言葉のもつ意味や働き、伝わり方や使い方等について問い返したり、捉え直したりして適切に用いる、すなわち、言葉を自覚的に用いながらより良い考えを創り上げる力を身に付けさせることが大切である。

前研究シリーズ「言葉を用いて熟考し、自分の考え<sup>注1)</sup>を筋道を立てて表現することができる子どもを育む国語科の授業」では、子供たちは、より確かな根拠を基にして、自分の考えと他者の考えの共通点や相違点を導き出した上で改めて自分の考えを形成したり、読み手を納得させることができるように文章構成や表現の仕方を工夫したり、それらを見直してより良いものにしたりのようになった。しかし、自分の考えを他者に伝える際に、言葉の意味や伝わり方を十分に吟味せずに言葉を用いてしまったために、自分の考えの根拠や意図までを十分に伝えられず、共有しきれない姿が見られた。

こうしたことから、研究主題を「言葉を自覚的に用いながらより良い考えを創り上げる子供を育む国語科の授業」と設定し、研究を進めることとした。

## II 研究の概要

## 1 国語科が目指す子供像

言葉を自覚的に用いながらより良い考えを創り上げることができる子供

## 2 育みたい資質・能力

私たちは、国語科における目指す子供像を達成するために、次のような資質・能力を育んでいくことが必要であると考えた。

- 言葉を自覚的に用いながら自分の考えを形成する力
- 形成した考えを基に言葉を自覚的に用いながら表現する力

言葉を自覚的に用いながら自分の考えを形成したり、表現したりするためには、次のような関わり合いが必要である。

文章や談話と関わり合うことで、言葉の働きや役割、文章構成や談話構成、文章表現の特徴など<sup>注2)</sup>を捉え、それらを踏まえて自分の考えを形成する。その上で、友達や教師といった他者と関わり合いながら、自分の考えを形成する。この自分の考えを形成する過程では、常に自分自身と関わり合うことが行われると考える。

また、形成した自分の考えを基にして表現する。その際、友達や教師といった他者と関わり合いながら、より適切な表現の仕方を考え、自分の考えを形成し直し、表現する。この形成した自分の考えを基に表現する過程では、常に自分自身と関わり合うことが行われると考える。

こうした関わり合いにおいて、どのような力や知識が身に付いたかを振り返ることで、言葉がもつ価値<sup>注3)</sup>を認識することができるかと考える。

上記のような資質・能力を育むためには、言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、国語の文化に関わることで、国語を尊重して、その能力の向上を図る態度を喚起していくことも必要である。

## 3 資質・能力を育むための手立て

### (1) 拡散的思考と収束的思考を働かせるための単元構成

本校国語科では、単元で身に付けさせたい事柄に基づいて、子供に取り組ませる課題を設定し、その課題の解決を目指して行う活動を「言語活動」と位置づけた。「言語活動」を位置づけることで、子供に、その単元において構成された学習活動の一つ一つに必然性や目的意識をもって取り組ませることができる。国語科における育みたい資質・能力を支える「言語活動」は、主に、「聞く」「読む」という自分の考えの形成に関わる行為と、「話す」「書く」という自分の考えの表現に関わる行為で構成されていると考える。単元で身に付けさせたい事柄を明確にした上で、拡散的思考を働かせる場面として、自分の考えを形成する場面において「ひとり読み（聞き）」「読み（捉え）の交流」を、収束的思考を働かせる場面として、自分の考えを表現する場面において「下書き」「意見交流」を設定した。

「ひとり読み（聞き）」とは、文章や談話が示す内容や特徴について捉え、それらを基に自分の考えを形成する活動である。

「読み（捉え）の交流」とは、「ひとり読み（聞き）」で捉えたことや形成した自分の考えを発表したり、他者の捉えたことや形成した考えを聞いたりすることを通して自分の考えを形成す

る活動である。子供に自分の考えを形成させるために、教師は発問や問い返しを行う。

「下書き」とは、形成した自分の考えを基にして表現する活動である。教師が事前に課題に対応した観点を示す。子供はその観点を踏まえた上で、伝えたい内容が相手に伝わり、納得させられるように表現していく。

「意見交流」とは、形成した自分の考えを基にして表現したものについて、教師が示した観点に基づいて分析したことを発表したり、他者の伝えたい内容を聞いたりすることを通して、より適切な表現の仕方を考え、自分の考えを形成し直し、表現する活動である。子供に自分の考えを表現させるために、教師は発問や問い返しを行う。子供はより適切な表現の仕方を基に推敲し、清書を行う。

「読みの交流」「意見交流」の終わりには、自分の考えを付箋紙に記述させ、次時の最初に一覧表である「座席表」(資料1)を配布する。また、「足跡シート」(資料2)に記述した付箋紙を貼り、単元における自分の考えを一覧できるようにする。こうすることで、自分の考えや他者の考えについて言葉を自覚的に用いながら様々な考えに触れることができ、その上で課題に対してより良い自分の考えを形成したり、形成した考えを基に表現したりすることができる。と考える。

## (2) 「モニタリング」と「リフレクション・モニタリング」

本校国語科では以下のように「モニタリング」と「リフレクション・モニタリング」を位置づける。

「モニタリング」については、「読み(捉え)の交流」「意見交流」で行う。単元内のそれぞれの学習活動の終わりに、付箋紙を用いて自分の考えを表出させることで、学習活動の中で出された考えの中から、何を取り入れ、何を取り入れなかったかを把握させる。その後、次時の最初に「座席表」として配布し、友達の考えを目にさせたり、その内容について質問させたりすることで、他者がどのような考えを取り入れたかや、どのような流れで考えを形成していったかを、自分と比較させる。そうすることで、他者の考えと比較したり関連付けたりしながら自分の考えを形成したり形成し直したりさせるきっかけとする。

「リフレクション・モニタリング」については、単元の最後の「まとめの時間」に行う。単元においてどのような力や知識が身に付いたかを振り返らせるために、以下に示す三点に絞って記述させる。一点目は、単元のはじめに確認したこの単元で身に付ける事柄を子供たちに確認させたのち、どのような力や知識が身に付いたかを振り返らせる。二点目に、この単元で身に付けた力や知識がこれまでの学習や生活とどのように結び付けることができるかを考えさせる。そして三点目は、この単元で身に付けた力や知識が、今後どのような場面でいかしていけそうかを考えさせる。それらを「足跡シート」に記述させる<sup>(注4)</sup>ことで、他者の考えと比較したり関連付けたりしながら自分の考えを再形成することができたか、拡散的思考と収束的思考を働かせながら課題を解決することができたか、また、学習活動を通して言葉がもつ価値を認識することができたかを確認させる。



【目指す子供像に向けた二つの手立ての位置づけ】

#### 4 資質・能力が育まれたかの評価について

育みたい資質・能力が子供たちにどの程度育まれたかを評価することで、手立ての有効性を検証していく。

自分の考えを形成する力については「ひとり読み」の記述を本校国語科の評価指標を用いて、単元の始めにおける一人一人の考えを形成する力を見取るとともに、学級全体の傾向を把握する。また、「足跡シート」に自分の考えを記述した付箋紙を並べて一覧させる。そして、「読みの交流」を踏まえて、どの程度自分の考えを形成する力が育まれたのかを、付箋紙を含む「足跡シート」の記述を一覧し、単元における考えの変容を分析することで見取っていく。自分の考えを表現する力については、形成した自分の考えを他者に伝わるように表現しているかどうかについて、清書された文章から読み取り、本校国語科の評価指標と照らし合わせ分析することで見取っていく。

また、抽出生徒を設定し、授業における様子を見取することで、検証の一助としていく。

#### 5 研究の経緯

研究1年次では、「読みの交流」「意見交流」で、拡散的思考と収束的思考を働かせるための二つの発問を位置づけたことで、発問を受けて発表された考えを聞いて、自分の考えと比較しながら自分の考えを発表したり、自分の考えと発表された考えを関連付けて言葉を推敲したりする姿が見られた。このように、自分の考えや他者の考えについて言葉を自覚的に用いながら様々な考えに触れ、その上で課題に対してより良い自分の考えを形成したり、形成した考えを基に表現したりすることができた。また、「モニタリング」「リフレクション・モニタリング」をさせることで、他者

の考えを聞いて再形成した自分の考えを付箋紙に書いたり、「足跡シート」の付箋紙を一覧して学習活動を通して身に付けた力や知識を自覚したり、今後はどう生かすかを考えることができた。このように、他者の考えと比較したり関連付けたりしながら自分の考えを再形成したり、学習活動を通して言葉がもつ価値を認識したりすることができた。しかし、拡散的思考を促す発問によって形成された自分の考えがその後の付箋紙や推敲に反映されない子供もいた。これは、拡散的思考を促す発問と収束的思考を促す発問を1時間の授業の中に位置づけたことで、学習活動が多くなり、拡散的思考を促しきれなかったためであると考えられる。また、拡散的思考を促す発問と収束的思考を促す発問を1時間の授業の中に位置づけたことで、拡散的思考の「モニタリング」を見取ることも難しくなった。そこで、拡散的思考を働かせる場面として、自分の考えを形成する場面において「ひとり読み（聞き）」「読み（捉え）の交流」を、収束的思考を働かせる場面として、自分の考えを表現する場面において「下書き」「意見交流」を改めて位置づけた。また、「モニタリング」について、付箋紙に書かせる内容や「足跡シート」に記述させる内容を引き続き吟味・改善していく。自分の考えと他者の考え、自分の考えの変容を自覚させることで、より育みたい資質・能力を育むことができると考える。

## 6 2年次のねらい

2年次は拡散的思考を働かせる場面として、自分の考えを形成する場面において「ひとり読み（聞き）」「読み（捉え）の交流」を、収束的思考を働かせる場面として、自分の考えを表現する場面において「下書き」「意見交流」を単元ごとに位置づけ、有効性を検証していく。また、「モニタリング」についても、付箋紙、足跡シートに記述させる内容を吟味・改善していく。

そして、資質・能力を育むための二つの手立てが有効であったかを検証する。

注1) 自分の考えとは、文章や談話において何が書かれていたり述べられていたりするかを捉え、その捉えた内容を更に自分の知識や経験と関連付けて、自分や他者が納得できる状態に形成された考えのことであり、言葉によって筋道立てて説明できる状態として表出したものを指す。

注2) 「言葉の働きや役割、文章構成や談話構成、文章表現の特徴など」は、総論における「知識」を指す。

注3) 「言葉がもつ価値」は、総論における「深い理解を伴った知識」を指す。

注4) 「足跡シート」において、「リフレクション・モニタリング」の三点は観点A、B、Cとして記述させる。

## 引用文献

- 1) 文化審議会国語分科会『分かり合うための言語コミュニケーション』, 2018年, 16ページ
- 2) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』東洋館出版社, 2018年, 131ページ

## 参考文献

- 井上尚美『思考力育成への方略—メタ認知・自己学習・言語論理（増補新版）』明治図書, 2007年
- 「国語教育」編集部『平成29年度版 学習指導要領改訂のポイント 小学校・中学校国語』明治図書, 2017年
- 国立教育政策研究所『国研ライブラリー 資質・能力 理論編』東洋館出版社, 2016年
- 同『教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』2013年
- 同『資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書1～使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力～』2015年
- C・ファデル, M・ピアリック, B・トリリング『21世紀の学習者と教育の4つの次元—知識, スキル, 人間性, そしてメタ学

## 国語科

習一』北大路書房，2016年

西岡加名恵『逆向き設計で確かな学力を保障する』明治図書，2016年

文部科学省『中学校学習指導要領解説 総則編』文部科学省，2017年

同『中学校学習指導要領解説 国語編』文部科学省，2017年